被災地派遣レポート＜第５回＞

主税局江東都税事務所長　鈴木邦彦さん

■　４月21日。いよいよスタート（出発当日）

自ら志願したとはいえ、複雑である。朝から、職場で本来業務をしながら、志願してよかったのだろうか。不安にかられる。まして、昨日の説明会の参加状況をみると皆さん若い。足でまといにならないようにという思いにかられる。総務局の募集は若手職員といい、ある局では３０歳未満は派遣しないという基準を設けているとの話しもあった。知力・体力では負けるが、気力だけは負けない気持ちだ。しかし、気力だけでなんとかなるものではない。まして、『・・・・いきなりハードな仕事が与えられました。小学生の通学路を確保するため瓦礫の撤去作業をしているのですが、近くに缶詰加工工場があったため、サンマなどの魚類が大量に散乱し、腐敗臭がひどいです。みんな我慢しながらやっています。今日が作業最終日です、またサンマと戦ってきます。』という我々と引き継ぐ第四陣派遣職員からのメールをみると相当大変な作業のように思えた。

今回、派遣を志願したのは、まず、被災者の方々に公務員として、都民として、ほんとの微々たるものではあるが、なんとかしたいという強い想いと所の部下職員だけに負担を負わせたくないという気持ちである。パフォーマンスではない。自らの公務員としての使命感である。不安はあるが、今の若者には負けたくない。いや負けないと自分を鼓舞して集合場所である都庁２階に８時に到着した。

車中、年だから、足でまといになるから行くべきではないと反対していた娘から、「東京都職員として、被災者のために全力を尽くしておいで！！（「炎」の絵文字）体調に気をつけて、無事に帰ってくるのだ！！」というメールが届く。気持ちを鼓舞して宿舎のある合同庁舎に向かう。

■　４月22日。疲れと悲惨さ（作業開始）

４時30分に宿舎のある大船渡合同庁舎に到着。車内で朝食。６時に庁舎４階で、第四陣に拍手で迎えられる。第四陣の６班班長から、申し送り事項や注意事項等の引継ぎを受け、７時に陸前高田市の災害対策本部（学校給食センター）に向けて出発。

（大船渡合同庁舎）

（給食センター①）

（給食センター②）

（給食センター③）

本日の業務は、５班と合同で、救助物資の搬出・搬入作業と寄附物品の寄贈者リストの整理作業である。パソコン入力は、２名で、残り８名は救助物資の搬出・搬入作業であった。７時３０分に到着したが、既に、自衛隊が避難場所への救助物資の搬出作業を行っており、市職員に挨拶する間もなく、市職員やボランティアと一緒に、搬出作業に参加。市職員のＮさんやＳさん（この段階ではお名前もわからず）の指示に従い、次から次に来る自衛隊の車両に水、米、野菜、カップ麺、パン、レトルト食品等の搬出作業に追われる。何がどうなっているのかもよくわからず、ただひたすら車両への詰め込み作業であった。９時３０分頃まで一気に次から次へと車両への運び作業である。この日は、一息つく間もなく、自衛隊による追加での救助物資の搬出作業に追われ、また、救護物資の搬入も続いた。ようやく区切りがつき、午前１１時４５分から１時間ほど昼食休憩に入った。午前中で水や米等の搬出があり、疲れた。腰にも若干来たなと感じる午前中であった。

午後は午前中に勝る救護物資の搬入であった。３０分も休憩しないうちに、４ｔトラックで、３０キロ袋入りの米２００袋が搬入されたことを皮切りに、水、１０キロの米、白菜、じゃかいも、たまねぎ、キャベツ、バナナ、トマト等野菜・くだものが５０箱から１００箱単位で搬入され、缶詰、乳製品、お菓子など相当数の量が搬入された。職員、ボランティアによる、手渡し作業である。特にトラックからの受け取りや指定された場所への積み上げはなんともいえないほど重い。手渡し作業でも米３０キロや水の重さは半端なものではない。たまねぎやジャガイモ等の野菜も非常に重いものを感じた。ようやく３時過ぎに一区切りつき、小休憩に入った。その際、職員の方にうかがったところ、避難所は約９０箇所あると伺い、そこに運ぶ自衛隊も毎日のことであり、大変な思いをしている。被災された住民の方が救護物資のボランティアで来られた折、小休憩の最中にお話しをする機会があった。「折角、東京都から来ていただいているのだから、このような救護物資の搬出入の作業をボランティアと一緒にするのではなく、市役所の職員も相当数亡くなっており、行政の仕事を手伝ってもらった方が良い。」との意見も戴いた。「我々は岩手県さんからの要請で来ており、どの仕事はやりたいということは言えない。市から県を通して要請された業務をできる限り遂行するだけです。」と。さらに、「特に、高田一中の避難場所には芸能人等からの炊き出し支援や牛丼などのさまざまな支援はあり、マスコミも来るが、ほかの避難場所には炊き出しも少ない。自分は被災者であるが、できる限り手伝わせてもらいたいと考え、自衛隊さんの搬出を手伝わせていただいている。」ともおっしゃっていた。

この言葉を聴いてジーンと目頭が熱くなった。短期間派遣で来て、荷物が重いとか体がきついとか言って弱音を吐いている余裕はない。自分の甘さを痛感した。まして、市職員は、３月１２日から毎日休むことなくここで働いている。自分自身に情けなさを感じるとともに、志願してきた以上若手職員に負けることなく、頑張らなければと痛感した。でも、本音はこのままで大丈夫であるのかという不安にかられた一日であった。

４時１０分すぎに本日の作業が終了し、宿泊先である大船渡の県の合同庁舎に戻る際に、給食センターから先の被災現場を車で走らせた。言葉に言いあらわせないほどの悲惨さ。魚の異臭もすごい。自衛隊や警察が瓦礫の撤去をしていた。一車線だけの道路が確保されていたが、瓦礫のヤマ。ヤマ。またヤマ。倒壊したマンション、津波にのまれたであろう車両。木材。鉄骨などあらゆるものが散らばっていた。体験したことがないが、まさにテレビでみた戦場の跡。津波の脅威をまざまざと目のあたりにしてなんとも言えず、「悲惨」としか自分には表現できなかった。まさに自然の脅威にほかならなかった。まだまだ行方不明者の捜索も行っているようでもあり、また被災者の方々も瓦礫の中を探している姿も見た。スタンドが倒れ、柱を仮設し、手動で営業しているガソリンスタンドもあり、復旧に向けて動き出しているようだが、１ヶ月あまりが過ぎ、まだまだ被災現場の瓦礫撤去も進んでおらず、仮設住宅の建設も進んでいないようである。でも、住民の方や自治体の方が一生懸命に復興に向けて生きている様子を拝見した。陸前高田市は地形の構造上、平地が少なく、高田第一中学校に仮設住宅が建設されているが、今後の計画は大半が小中学校のグランドに仮設住宅を建設する計画のようである。車で気仙川周辺を走らせている最中、横田小学校のグランドで建設資材がおかれている様子も拝見した。

（高田第一中学校に建設された仮設住宅）

（小友小学校体育館）

■　４月 23 日　古着の運搬

昨日の班長ミーティングで小友小学校の校舎清掃と通学路付近の瓦礫撤去も終了し、全国から送られてきた衣料品を仕分けして、別な場所への古着を運搬することになった。朝８時すぐに横田中学校に向かった。グランドは見事に桜が咲いていたが、自衛隊の車両が駐車していた。県職員のＫさんの指示で、横田中学校から旧一関市立中川小学校（廃校）に運搬することになった。

衣類の仕分け作業に参加していた堺市職員と一緒に横田中学校体育館（３月 12 日に卒業式が予定されており、舞台正面には国旗・校旗が掲げられ、向かって左正面には卒業式の式次第が飾られ、体育館に紅白幕が飾られてあった。そして、体育館と校舎の渡りの一部分も損壊していた。地震の爪跡を垣間見た。）から２トン車二台にダンボールに入った古着を積み込み、その車両を追いかけ、旧一関市立中川小学校体育館へ都職員 15 名で搬出作業を行った。午前、午後各１往復で本日の作業は終了。

古着といっても新品も混じっていたようである。サイズや性別もばらばらですぐに被災者に支給できず、Ｋさんの話によれば、後日、陸前高田市でアルバイトを雇用して仕分け作業をするとのことであった。被災された人を思い、衣料品を送ってきた国民の思いは大事にしなければならないが、古着ではいかがかとも思うし、また人手がない中でサイズ、性別、品名を仕分けしていなければ整理も困難であり、被災者の方々に届くのが遅れる結果になるということを痛感する一日であった。

■　４月 24 日　救助物資の搬出作業

今日は、22 日に引き続き、救助物資の搬出作業と被災者名簿のパソコン入力作業。22 日同様に７時３０分に到着したが、22 日と同様に、自衛隊が避難場所への救助物資の搬出作業を行っており、市職員やボランティアと一緒に、搬出作業に参加。昨日の雨で外にあった水のダンボールが濡れて、運びにくい中、自衛隊の車両に搬入。次から次に来る自衛隊の車両に水、米、野菜、カップ麺、パン、レトルト食品等の搬出作業に追われる。概ね 10 時近くで終了。この先は、22 日とうってかわり、県からのパン等の救護物資や寄贈物品の牛乳等の搬入しかなく、被災者名簿のパソコン入力作業以外は待ちの状態の繰り返しであった。

その間、市職員のＮさんと話をする機会があり、「ご自身も自宅を失い、親族も失い、ご家族も避難所にいること、本来は３月に定年で退職する予定であったが、３月 11 日からこの給食センターに寝泊りして、救護物資の搬出作業をしているということ。地元のＯ代議士事務所に電話して、なんとか住民に物資を送ってくれと頼んだこと。岩手県からの救護物資が２ヶ月で打ち切られること。」などを伺った。その中で、「知り合いがなくなったと聞いても今は涙がでない。今回被災した中でお互いに生きていた知人と再会したら生きててよかったと涙した。」と聞き、なんともいえない気持ちに駆られた。まさに、人の深い痛みや深い悲しみの姿がそこにあった。

今日は、あまり、午後からも救護物品の搬入作業が少なく、４時過ぎに作業終了。また、寄贈物品者名簿や被災者名簿のパソコン入力作業も終了し、データを市職員に引き続いた。作業終了後に、Ｎさんから、良かったらカレーをつくったので食べていって欲しいと声をかけられたが、お気持ちだけいただき、丁重に辞退した。同時に、ＮさんやＳさんに我々は明日別な場所で作業し、明後日東京に帰る旨を伝え、「何もできなくて申し訳ないが、体だけは大事にしてください。」と伝え、センターから車で宿舎である合同庁舎に向かった。

（余談だが、昨日の班長ミーティングで話があった第 6 陣から担当の罹災証明相談受付業務が市仮庁舎と公民館の 2 箇所で開始される旨の記事を 4 月 24 日付け東奥新聞で拝見した。また、大船渡市で支給される被災者支援額も掲載されていた。）

■　4 月 25 日　古着の運搬

今日は 25 日に引き続き、横田中学校から旧一関市立中川小学校（廃校）への古着の運搬作業。7 時 30 分に横田中学校に到着。中学校も再開しており、ちょうど登校時間にあたり、「お早うございます。」と声をかけると、「おはようございます。」と挨拶する中学生。「何年生ですか。」と声をかけると「一年生です。」と明るい声で返事をしてくれた。でも、この中学校は津波の影響をあまり受けていないようであるが、学校から帰宅し、津波の被災にあった子供も多かったと聞いており、学校は再開しても、この中学生たちのこの悲しみに対するストレスは想像を絶するものに違いない。

今日から、衣料の整理に堺市に代わり、長崎県雲仙市から職員の方がみえるので、旧一関市立中川小学校（廃校）での搬入作業と横田コミュニケーションセンターでの衣料品の被災者への配付作業を依頼された。2 名に被災者への配付作業を任せ、13 名は搬入作業のため、旧中川小学校に向かった。午前中 4 トン車 2 台、午後 4 トン車、2 トン車各 1 台分の搬入作業を行った。午後から、4 班が応援に来て、概ね 3 時過ぎに作業が終了した。途中、午後から落雷もあり、夕立にもなった。

黙々と運び出し、体育館に積み上げていく。体育館半分程度に積み上げ、横田中学校の古着運搬作業は 23 日、24 日、25 日で終了した。そして、班長である私が声かけることもなく、ダンボールの切れ端や紙等のごみを自主的に回収し、持ち帰る。当たり前のことであるが、誰からの指示もなく、動く職員、ほんの小さなことだが、感心させられた。

横田中学校に戻り、Kさんに終了した旨を報告したところ、明日からも隣の横田小学校から広田小学校への同様の古着の搬出作業があること、新しい担当の I さんを紹介された。明日から新しい陣がくるので、よろしくと伝え、また「お世話になりました。」と挨拶して宿舎に戻った。

■　4 月 26 日。引継ぎし、東京へ

第 6 陣を 6 時に向かえ、全体の引継、第 6 陣の 6 班への引継、第 6 陣の宿舎出発を見送り、8 時 40 分に宿舎出発。出発前に総括班長のMさんから任務を終了した開放感から気が緩んでいるので、都庁につくまで職務としてきちんと遂行するよう班長から指示して欲しい旨の話があり、それを伝えてバスに乗り込む。「任務を終了した開放感から気が緩んでいる。」というのは自分自身にもいえることであった。かなり体力を消耗し、合同庁舎の 4 階を上がるのもしんどいほど腿が張り、腕も腰もシップや薬を塗る状態であった。本音をいえばなんとか若い職員へ付いていけたと思っている。

特に私の班は私を除けば 25 歳、私を加えると 31.2 歳になる。わたしからみると自分の

子供と一緒である。車中や休憩中では若いなと思える感じがしたが、この４日間の作業は一生懸命行っていたと思う。黙々と不平不満（当たり前のことだが）を言わず、動いていたのではないかと思う。ほかの陣もそうだと思うが、この陣も総括班長のMさん、各班長さんの指示を受けて動いていた。指名されたとは言え、高いモチベーションで被災地支援業務にあたったのではないか。

私自身に関しては、かなり疲れたのが実感。でも志願しただけに、若い人には負けなかったと自負できる。ただ、被災された人のことを思えば、まだまだ支援しなければならないという気持ちを痛感した。疲れたなんて言い訳をいっている余裕はない。まだまだ、甘い。実質４日間の活動は微々たるものであり、職員としても、都民としても、何らかの被災者支援をこれからもしていきたいと考えさせられる６日間であった。同時に、「仮に東京で同じように地震があった時、公務員としてＮさんやＳさんのように自分は行動できるのだろうか。３月 11 日以上の地震が東京に起きた時、自分はどう都民を守ることができるのだろうか。」を改めて考えさせられる６日間でもあった。

※このレポートは、４月時点の活動記録であり、掲載日現在では行程は８泊９日、宿泊場所は遠野市内の民宿になっています。